

思考力・判断力・表現力を養う授業を目指して

木 下 ミユキ

はじめに

幼・小・中の一貫教育を進める中で、国語科で願う豊かな学びの姿を具体的に考えてみた。中等部では、様々な言語活動を通じて、抽象的な感覚や概念をことばで獲得したり、より豊かに表現したりすることを指標としている。そのために、さまざまな文章や資料を読む機会や、自分の意見を述べたり書いたりする機会を他者との関わりの中で充実させ、自分の感じたことや考えたことを簡潔に表現する力を育成することを今後の課題とした。

ここで、国語科における思考力・判断力・表現力について、学習や日常の言語活動では思考・判断が同時に行われたり繰り返されたりする機会が多いことや、思考力・判断力は、筆者や話し手・聞き手の意向などを讀んだり聞いたりして「理解する活動」及び、話したり書いたりして「表現する活動」に総合的に表れるとの考えから、大きく「思考力・判断力」と「表現力」の2つに分けた上で、それぞれを次のように仮定した。

(i) 思考力・判断力

様々な言語材料に含まれる意味や考え・意図等に基づいて、直感を働かせたり、論理的に考えたり、想像をふくらませたりして、自分の行動などの方向や方法を見出す能力

(ii) 表現力

自分の考えなどを整理して、表現形式を思考したり判断したりしながら話したり書いたりする能力

そこで、この一年間は中学一年生にできるだけ確かな読解力をつけることを、指導の中心において、授業を進めてきた。それは、思考と判断を同時に行うことを最も必要とする学習だからである。さらには、その読み取った内容に基づいた発展的な学習を行うことにより、表現力の向上を目指した。表現力を高めるといっても、そう簡単にできるものではない。生徒たちの考え方はかなり固定されている。また、日常生活をおくるのには単語だけで十分通じる状況のなかで過ごしており、多様な表現というものは生まれにくい。さらに、挙手をして、きちんと発表するとなると、絶対に間違ったことは言いたくない、という思いが強くなる。しかし、感覚の鋭い生徒は、挙手をする自信は無いが、時としての的を射た内容をボソッとつぶやく。私は挙手をしてきちんと発表する生徒と同様に、そのつぶやくを掬い上げることに神経を張り巡らしていた。「おっ、今言ったことを大きな声でもう一度言って」。すると自信なさそうな様子で、ボソボソとつぶやく。それをきちんと板書すると、「えーっ、合ってたんだ」と喜ぶ。このようにして生徒の心をほぐし、生徒が奥底に持っているものを引き出すことを、授業を進めるうえで常に心がけていた。

その他に心がけたことは、生徒が発表したことは必ず板書することだった。教師の勝手な判断で削除することはしなかった。すると、自然と生徒のほうから、疑問に思う点が提起される。それについて何人かが意見を述べていくうちに、削除すべきかどうかが決まる。発表した生徒自身が「それは違うので、消してください」ということもかなりあった。これは、生徒自身に他者の意見を聞き、自分の考えを深めていく力が身につくにつれてよくあると考えてよい。

また、班毎にまとまって意見を交換することも試みた。文学作品を読み進めるうちに、なかなか意見が出ないことがある。そういう場合によく「三人寄れば文殊の知恵」と言って、まず、班のなかで話し合わせた。様子をみながら、班の考えを発表してもらおう。すると、班の構成メンバーによって、

かなり違った意見が出てくるが多かった。その違う意見について、積極的に発表する生徒が出てきて、授業はかなり活発なものとなり、時としてはにぎやか過ぎることにもなったが。この点は、私自身の反省点として、銘記しておく。

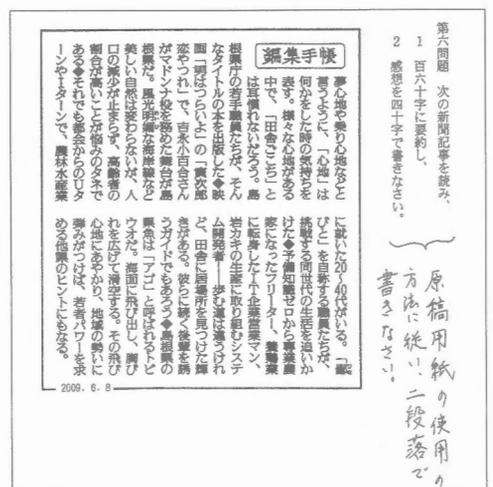
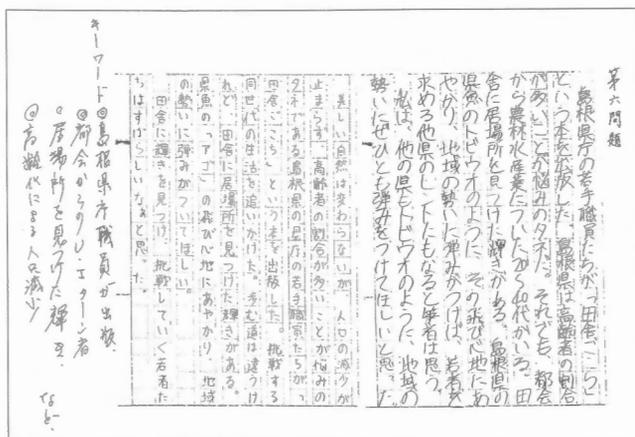
(1) 表現力の向上を目指して

生徒たちの思考力・判断力をを同時に育てるものとして、わたしは新聞記事を活用することとした。短時間で生徒たちが読みこなせるものとして、まず頭に浮かんだのは、字数が比較的少なく、しかも筆者の考えを的確に述べてあるコラムであった。そこで、私が家庭で購読している読売新聞を使用することにした。使う記事を選ぶための時間に制約がないからである。記事を探り上げる際に注意したのは、まず、政治的な内容は採り上げないということであった。次に、好みの偏りがないように、ということも心掛けた。例をあげると、スポーツでは、野球、相撲、水泳、マラソン、サッカー、バレーといろいろあり、そのうちのどれかを取り上げると、詳しい生徒はいくらでも書けるが、関心のない生徒は、文章の意味することすら理解できない、ということになりかねないからである。

一学期の教育実習生の授業で、新聞について取り上げてもらったこともあり、新聞記事を示すと生徒たちはその内容に興味を抱き、すぐに読み始める生徒もいた。それぞれに好きなものを選ばせると收拾がつかなくなるので、3種類のコラムを用意し、それぞれのコラムを皆で読みあった。その後、その中から自分の好きなものを一つ選ばせ、それを160字以内に要約し、40字で感想を書くこととした。初めてのことで、記事を選ぶのに手間取る生徒もいる半面、すぐに書き始める生徒もかなりおり、生徒の学力の多様性に気づかされた。早くできた生徒のものを例として私が読み上げた。このとき必ず押さえている必要のある言葉、つまりキーワードをどのような形で使っているかということに触れることを心がけた。キーワードを確実に使いこなすことは、思考力・判断力を養ううえで、最も重要なことである。早く書き上げた生徒には、他の記事についてもまとめるように指示し、できる限り時間内に全員の文章を見るように努めた。しかし、時間内にまとめられない生徒は必ずいるので、終礼後に提出してもいいことを伝え、それぞれに添削をして国語係りに返却させた。

一学期の期末テストに使えるような記事を探していると、県庁の職員たちの活動を取り上げたものがあつた。500字未満のコラムであり、しかも地元島根県に関する内容なので、生徒も身近に感じるだけでなく、彼らの将来を考える材料にもなると思い、使うことに決めた。採点の基準になるキーワードは、次の4点にした。

- 1, 島根県庁職員が出版
- 2, 高齢化による人口減少
- 3, 都会からのU・Iターン者
- 4, 居場所を見つけた輝き



この内、2つくらいは使用していないと、いい解答は書けていない。次に生徒の書いた模範解答を挙げておく。

提出された内容を整理してみると、面白い結果になったので、一覧表に示す。

	男 子		女 子	
	母から息子へ	息子から母へ	母から息子へ	息子から母へ
1 組	6	6	5	8
2 組	6	10	7	10
3 組	6	9	6	10
4 組	10	5	10	3
合 計	28	30	28	31

どちらか一方の立場にたった内容に偏ることが無かったのは、生徒たちの心がかなり成長し、いろいろな立場で物事を考えることができるようになった証明ではないかと考える。では、それぞれのクラスから選んだ作品を次に紹介したい。

1. 母から息子へ

生徒A (男子)

あの時のように、寒い季節になりましたね。私は今でも雪が舞っているのを見ると、あのときのことを思い出します。

おまえが谷本さんの家に行ってしまうという時、たとえ冬の間だけといっても、私はとても寂しい気持ちでいっぱいでした。学校の勉強はどうか、谷本さんの家ではどうか、お前の様子が知りたいと何度思ったことか知れませんが、だからこそ、おまえが「腹へった」といって帰ってきてくれたときには、私は本当にうれしくて泣き出しそうでした。たくさんおまえの話を聞いてあげたかったし、たくさん頭をなでてあげたかった。なによりおまえの顔を見ているだけで幸せでした。でも私はおまえに対してつらく当たったね。あれは、親の私が泣いたり、喜んでいたりしてはいけない、がまんしなくてはいけないこともあるんだ、ということ传达了かったからです。

今ではおまえもりっぱな大人になりました。たまにはこの家にも寄って行ってくださいね。

B (男子)

啓太へ

お手紙有難う。啓太の子ども十四歳になったのですね。十四歳といえば、私はあの冬のことを思い出しますが、啓太は覚えているでしょうか。

啓太が街の学校へ通うために谷本さんの家に居候することになると、そこでつらい生活をしていないかとても心配でした。でも街の学校でしっかり学んで、私たちみたいな貧しい生活から抜け出してくれると思うと、啓太を信じてみようという気持ちになりました。

そんな時に啓太が帰ってきて、無事に生活しているのを見ると安心し、すごく嬉しかったです。しかし帰ってきたのは夜中の十二時。理由も、腹が減ったというだけで危ない雪道を帰ってきたのは、不安を感じました。

やっぱり居候先でしんどい思いをしているのだなと思いました。しかし、十四歳にもなって、周りの人のことも考えずに行動したことには、まだまだ子供だと思いました。街の学校へは学問だけでなく、他の人のことも考えられる人になってほしいとやったのに、少し期待とは違ったのでほうきの柄でたたきました。それから他の人のことも考えられるようになった啓太を見て、あれから成長したなと思いました。

これから寒くなります。身体には気をつけてください。

C (女子)

啓太、結婚おめでとう。この間生まれたと思ったのに、もうそんな年ですか。早いものですね。この知らせを聞いて、母さんは真っ先にあの出来事を思い出しました。

あの時あなたは十四歳で、谷本さんの家に居候させてもらっていましたね。その日はすごい雪で冷え込んでいました。玄関で話し声が聞こえると思ったら、啓太の声。思わず、顔がゆるんでしまいました。啓太は信じないでしょうけど。

でも、甘くしたら啓太のためにならない、と思いました。だから心を鬼にして、あなたに厳しく当たりました。あなたはどう思ったんでしょうね。私は啓太が帰った後、うれしくてほとんど眠れませんでしたよ。

しばらくしてあなたに会うと、大きくなったと感動してしまいました。同時に、以前の親に甘える子供の啓太が懐かしくもなりました。

少し長くなりましたね。これからは、二人で二人三脚でがんばってくださいね。

D (女子)

また、寒く長い冬がやってきましたね。元気でやっていますか。こちらのほうは前と変わらず、よくやっています。

今、もうすぐ夜の十二時になります。なぜか目が覚め、ふっとお前が「腹が減った」と帰ってきたときのことを思い出しました。年をとると昨日のことは思い出せないのに、昔のことは良く思い出せるものなのです。

あの時私は、お前が帰ってきてくれて、いろいろな気持ちが頭の中でごちゃごちゃになりました。あの日言ったような気持ちと、元気な姿が見られて嬉しい気持ち。私もみんなもお前が元気でやってるか心配していたのです。しかし、私はお前をしかったです。周りが心配する、ということを知ってほしかったし、我慢することを知ってほしかったのです。それが上手くお前に伝わったのか、私はあの後不安でたまりませんでした。しかし、あの後谷本さんの家を抜け出すこともなく、無事就職し、何事もなくここまで成長してくれたので、分かってくれているのだと信じています。

また、空いた時間があれば帰ってきてください。たまにはお前の元気な姿を見せてください。それでは体に気をつけて。

2. 息子から母へ

生徒A (男子)

今の季節、そちらでは雪はどのくらい積もりましたか。こちらではなかなか積もりません。

最近、年をとるにつれてあの十四の冬を思い出します。谷本さんの家に居候したことがありましたね。あの時、上品にと思いきり、飯をろくに食わず、水を飲んでごまかしていました。そんなことをしていたために、まともに勉強ができませんでした。今でもあの時は、きつい思いを自分からしていたことにあきれています。

ですが、あまりにもがまんできなくなって、夜、あの上がり下がりのある道を自分の家まっしぐらに歩いたり走ったりしていました。

他の人の迷惑というものを考えられなかった私に、怒ってくれたのは母さんだけです。今でもあの時、怒ってくれた母さんに感謝しています。そのおかげで今は、仕事でも周りのことを考えることができ、うまくいっています。

家族もでき、子宝にも恵まれ、とてもいい日々をおくっています。私もいつか、子供にこの話をするつもりです。

B (男子)

お母さん、寒い日が最近続いていますね。そちらの方ではかなり雪が積もっていると思います。都会でも久しぶりに雪が降りました。元気にしていますか。

この季節になると、あのことを思い出します。覚えていますか？僕が谷本さんの家に居候させてもらった時のことです。あの時は谷本さんの家だったということで、少し遠慮してい

ました。だから、ご飯は二杯にしぼっていました。そして、ある雪も降らず風のない夜、僕はだれにも気づかれないように谷本さんの家を出て行ってしまったのです。その日、お母さんにほうきの柄でたたかれた時のことが、脳裏にしっかり焼きついていますよ。

ご飯が食べたかったからと行動してしまった自分が本当に情けなかったです。あの事件から、僕はできるだけ我慢や周りに気を配ることを意識してきました。たたかれに帰ったあの日、谷本さんの家に着いたときはもう朝の四時でした。皆寝静まっていたのでだれにも気付かれることはありませんでしたが、十四にもなって家へご飯のためだけに帰ることを決行したことを後悔しています。

いまはもう大切な一つの思い出なのですが、ほうきの柄でたたかれていなければ、しっかり生活ができていたか分かりません。また、近々家に帰ろうと思っています。思い出話をたくさんしましょう。

C (女子)

お元気ですか。僕は今、あの学校の先生をしています。僕が何時間もかけて通った、あの学校です。こうして生徒の前に立つと、谷本さんのお宅に住まわせてもらったことや、あの夜たたかれながら食べた飯を、今でも思い出します。

あの時は本当に申し訳ありませんでした。あの時、僕は学校に通いたいあまり、居候までさせていたのに、ご飯が満腹に食べられないくらいで帰ってしまいました。自分の、学校に通いたいという意思が弱かったのであろうと、今となっても、まだ反省しています。あの頃は幼かったですが、成人し、子供を教えるという立場になって、母の気持ちも良く分かります。

あの時の母の愛情を心にもちながら、これからも仕事にはげんでいきたいと思います。お母さんもお体に気をつけて、元気にお過ごしください。私も休みができれば、帰ろうと思っています。

D (女子)

お母さん、元気に過ごしていらっしゃいますか。僕は、元気に暮らしています。最近、また寒さが一段ときびしくなってきましたので、体に気をつけて過ごしてください。

僕は最近、中二のあの冬の出来事を何度も思い出します。僕が「腹へった」と言い、家へ帰ったあの夜の事です。あの夜は、僕は本当にばかなことをしてしまったと、今でも思っています。谷本さんの気持ち、お母さんの気持ちを全く考えていませんでした。そして、自分が何のために谷本さんの家でお世話になっているか、ということも忘れていました。お母さんは、そんな僕を一生懸命に怒ってくれましたね。

そんなお母さんのおかげで、僕はあれから一生懸命勉学に励むことができました。そして今、やっぱりお母さんのおかげで、職に就くことができたと思っています。もしあの時に、お母さんが僕を叱ってくれなかったら、きっと僕は勉学に励むことも、もちろん今の職にすら就くことはできなかったでしょう。それどころか、何度も何度も、家へ帰ったりしていたでしょう。本当に今の僕があるのは、お母さんのおかげです。お母さん、本当にいろいろとありがとう。

少年の立場で書いた文章の多くは、教科書の文章をなぞっているに過ぎないものが多かった。しかし、母親に厳しく叱られたことについては例に挙げている文章のように、そこにこめられた母親の愛情をきちんと受け止め、その後の人生に生かしているという内容ばかりだった。「年をとるにつれて」とか「この季節になると」という表現も多いことに驚いた。生徒たちは家庭での会話の中でも、十分学んでいるのではないかと考えられる。次に、母親の立場で生徒が書いた文章について考えてみる。教科書の本文には、空腹に耐えかねて夜中に帰ってきた少年を叱る内容

しか書かれていない。ところが、生徒の書いた内容を読むと、「嬉しかった・心配していた・心を鬼にして」という、母親の心情をより深く書き込んでいることに驚かされる。彼らの両親が平日頃から子供のことをどのように考え、接しているのかさえ浮かび上がってきそうである。生徒たちの理解力の素晴らしさや想像力の豊かさを改めて実感した。

家庭の教育力不足が取りざたされ、子供たちの活字離れについて懸念されることの多い時代である。しかし、授業のために選んで提示した作品には真剣に取り組んでくる生徒が多いのは事実である。すると、それに応え、更に生徒の持っている能力を十分に伸ばすためにやはり真剣に作品を選ぶ努力を忘れてはいけないことを痛感した。

(3) 百人一首の学習をとおして

附属中学校では「日本の伝統文学に親しむ」ことを大切にしており、2学期終わりごろより百人一首に全員が取り組む。古典の学習は、1学期の初めと2学期にも済ませており、歴史的仮名遣いへの戸惑いはない。なにより、長い文章を読み取る必要がないのも、生徒にとっては魅力らしい。さらに、五・七・五・七・七のリズムによって詠まれた和歌は、聞いているだけで心地よい。

授業では一字決まりで有名な「む・す・め・ふ・さ・ほ・せ」で始まる七首の歌をまず覚えることにした。

村雨の露もまだ干ぬ檣の葉に霧立ちのぼる秋の夕暮れ	寂蓮法師
住の江の岸に寄る波よるさへや夢の通ひ路人目よくらむ	藤原敏行朝臣
めぐり逢ひて見しやそれとも分かぬ間に雲隠れにし夜半の月かな	紫 式部
吹くからに秋の草木のしをるればむべ山風を嵐といふらむ	文屋康秀
寂しさに宿を立ち出でて眺むればいづこも同じ秋の夕暮れ	良暹法師
ほととぎす鳴きつる方を眺むればただ有明の月ぞ残れる	藤原実定後徳大寺左大臣
瀬を早み岩にせかる滝川のわれても末に逢むとぞ思ふ	崇徳院

生徒全員が持っている資料集にそれぞれの歌について、ある程度の意味が書いてある。上句と下句との始まりの音さえわかれば札は取れるので、内容の詳しい把握にはそれほど力を入れなかった。覚えるために、上句と下句とを一致させるクイズをしたり、はやりの漫画も使ってみた。しかし、時間は限られているので、次に「あ」で始まる23首を加えた、合計30枚を確実に覚えられるように、練習の初めにまずこの30首を読み上げた。30首がほとんど全員頭に入ったところで、順不同にして読み上げることとした。最初は100首全部読むことはなかったが、歌をしっかりと覚えることを冬休みの宿題にした。そして、3学期が始まると、学年ごとの百人一首大会に向けて、早く確実に、しかも多くとることを目標にして、100首を時間内に読み上げた。前半の50首は様子を見ながら、各班それぞれ取れたことを確認して進めたが、後半になると札数が減ったこともあり、詠んでいる途中に取ることが多くなった。最初は、その授業時間にそれぞれが取りたい一首を書かせることもしたが、やがて好きな歌が出てきた生徒は始める前から、「絶対にこれを取る」と大きな声で言うようになった。生徒の関心や意欲が十分高まる時期に学年の百人一首大会は行事計画の中に組んである。

大会が終わった後、私は新たな課題を出した。札を取る行為は確かに能動的であるが、その出発はまず「覚える」という受身の立場である。せっかく五・七・五・七・七のリズムに慣れた成果を生かして、生徒自身のうたを作らせたいと考えた。自分の思いを短詩型文学で表すことも、表現力の向上につながるはずである。実は、知人に「第16回『与謝野晶子短歌文学賞』」の応募要項をもらっていた。与謝野鉄幹・晶子山陰吟行80周年と奥出雲町誕生5周年記念が重なっているため、奥出雲町に著名な歌人も出席し、歌会が開かれるという。その中で私が目をとめたのは、「青春の短歌、対象、中学生・高校生」というところだった。幸いに、月刊雑誌『短歌現代』3

